

彌勒思想の展開

香 川 孝 雄

一、序 論

二、Bavari の弟子として説かれる彌勒

三、當來佛として説かれる彌勒

四、前生話を有する彌勒

五、Brahmayus と Brahmanavi を父母とする彌勒

六、彌勒と阿逸多との混同

七、彌勒思想成立の年代學的考察

八、結 び

一、序 論

現代アメリカの哲學者モリスは、その著、「開かれたる自我⁽¹⁾」の中において、創造的な生活に向つて人間が進歩するために、どの様な道をとるべきかということについて過去の歴史に行われた十三の道を選んで大學生に意見を

求めたところ、「マイトレーヤの道」が實に全體の四〇%を占めたといひ、更に、アメリカ知識人一般におけるこの様な希望が、今後のアメリカの指導的思想とならねばならぬとする。又、同じくアメリカの文明批評家マンフォードは「古來佛教徒達によつて豫言された『マイトレーヤ』の時代は私たちの目前にある」と述べている。⁽²⁾ この「マイトレーヤ」こそは、今問題にしようとする彌勒であり、友愛を意味し、未來何萬年か先に地上に出現して、この世を救済する菩薩の名である。この様に奇しくも二人のアメリカ知識人が、マイトレーヤを取り擧げたことについては、現代の世界情勢と、古代インドで彌勒信仰の盛んとなつた時代とは互に相通ずる何物かがある様に考えられる。即ち、古代インドにあつて、政治的、社會的、教團的に危機を感じた佛教徒達にとつて彌勒の信仰は大きな光明であり、期待的であつたと思われる。それと同様に現代の世界情勢は極端な機械文明の發達により人間は機械の奴隸と化し、又、政治的には、東西兩陣營の對立により、何時、原子爆彈が炸裂するかも知れぬ不安におびえているのである。この様に考えるならば、現代アメリカの思想家達が、相前後してマイトレーヤに注目するのも當然と言えるかも知れない。そこでこのマイトレーヤの思想を深く掘り下げることは我々佛教學徒の責務であると考え筆を執つたのである。この問題を思想的に追究せんとすれば、當然その起源より考察を進めねばならないであらうが、彌勒についてはその展開を論ずるのが極めて無難しい以上により困難である。西洋の學者は屢々この起源を論じているが日本人では殆んど見受けられない様である。西洋では例えば J. Filiozat, J. Przyłuski, S. Lévi, M. Abegg, E. Lamotte 等であるが、彼等はイランにおけるメシヤ信仰に由來するとし、その理由として、Maitreya は Maitrī (慈愛) より來り、イランの Mithra 神に似ていること。更にウイグル語で書かれたマニ教の經典の綿密な考證、龍華樹を手にした彌勒像が特にインドとイランの境やバーミヤンの付近で發見せられることの多いこと等

を擧げている。この様な研究は將來の課題として今は佛教内における展開のみに焦點を絞つて考察した。佛教内の事柄については、既に明治四十四年に刊行の松本文三郎博士著「彌勒淨土論」がある。この書は彌勒關係の經典を「所謂六部經以外の大乗彌勒經典」「所謂彌勒の六部經」「阿含部に於ける彌勒經典」と分けて論述し、その結果將來佛としての彌勒信仰の起源を佛滅後三百年以後から約五百年の間に大乘教徒によつて創說せられたものなることを説き、更に彌勒經典の原形と其發展につき、經典の成立順序、その相關々係を論じて居られる。しかし乍らその發表以後半世紀を経過し、その間における印度學佛教學の進歩は著しいものがある。今や新しい角度から検討しなす時期にあると言ふことが出來よう。そこで筆者は、阿含部とか、大乘經典とか、彌勒六部經典等の枠をはずして、その内容より彌勒に關する佛典を類型化し、その發展の跡をたどり度いと思う。

二、Bāvari の弟子として説かれる彌勒

彌勒に關して最も古いと考えられる説話はスッタ・ニパータの彼岸趣品 *Paṭāyana-vagga* に出ているものであらう。*Paṭāyana* の成立については一部の學者に異論もある様であるが特にその中の叙偈 *Vatthugāthā* の部分は經典史の上から言つても、又、その彌勒の説話の内容から言つても最も古い層に屬すと考えてよい。今、その説話の内容を述べれば次の如くである。

Bāvari は Kosala の都から *Dakṣiṇa-patha* (デツカン) へ行つて *Assaka* と *Alaka* の境域なる「ゴダバリー河畔」に定住した一梵志であつた。近くの村で彼は大きな施與を營んでそれが終つた時、一人のバラモンがやつて來て彼に五百金を乞うた。バーバリは「有せしところの施物は皆施捨したところであるから我に五百金なし」と拒んだと

ころそのバラモンは「若し我に五百金を與えざれば七日にして汝の頭を裂いて七つにならしむべし」とおどした。強い不安に惱まされたバーバリは「その惡バラモンは頭及び頭裂の意味を知らないのだ」と天神に聞かされやつと安心し、しからばこの地上において頭と頭裂の意味を誰が知っているかを問うた。天神曰く。「かの佛具眼者は世間において法を説き給う。彼の下に行つて汝は問え。彼は汝にそれを解説し給わん」と。バーバリはその語を聞いて弟子たる十六人のバラモン—Ajita, Tissametteyya, Puṇṇaka, Mettagu, Dhotaṅka, Upasiva, Nanda, Hemaka, Todayya, Kappā, Janukaṇṇi, Bhadrāvudha, Udaya, Posāla, Mogharājan, Pingiya—を佛所へ派遣した。彼らは Ajaka の Paṭiṭhāna 及び Mahissati, Ujjeni, Gonaddha, Vedisa, Vanasavhaya, Kosambi, Sāketa, Sāvatti, Satavya, Kapilavatti, Kusināra, Pāva, Bhoganagara, Verāṇi, Māgadha と次第に Pāsāṇaka のチャイイトヤに詣でて佛所に到つた。彼らは世尊の三十二相の圓滿具足せるを見て歡喜し、心私かに「吾師の生死、族姓、相貌と歌詠とを告げよ」と思念すれば世尊は「汝が師の齡は百二十歳、その姓はバーバリ、三種の相あつてその身に顯じ三種の吠陀に通達する。その三種の相とは、舌覆面相、眉間白毛相、陰藏相である」と解説せられた。更に Ajita が頭及び頭裂を問わんとするに對し世尊は「癡は是れ頭、慧と信と念と定と精進とは是れ頭を裂く所以のものなり」と説いて彼らは歡喜し禮拜した。

以上が Pātāyana-vagga の叙偈 Vathugāthā の部分のみの要約であるが更にこの經は阿逸多問經 Ajitamāna-vapucchā 帝須彌勒問經 Tissametteyyamānavapucchā 以下十六人の弟子が夫々質問を發して佛がこれに答えるのである。

ここにおいては阿逸多と彌勒とは後世屢々兩者が同一人視せられるのとは異つて全然別人であり、且つ釋尊當時

のバーバリの十六人の弟子の中の人物として描かれている。この様に彌勒をバーバリと關係付ける資料は外にも屢々見受けられるが、その續柄やバーバリなる人物については一定しない。先づバーバリが三相を具足せること及び彼と彌勒どが師弟關係にあつたことについては龍樹も智度論の中に述べている。

又如彌勒菩薩、白衣時師跋婆梨。有三相、一眉間白毛相、二舌覆面相、三陰藏相。⁽⁶⁾

又、賢愚經には波婆梨品なる一品があつてバーバリについて詳しい物語があるが、そこには彼を Pāṭaliputra の國師として扱つており、彌勒が波婆梨の舅であつたとする。更に彌勒の出生について一切智光明仙人慈心因縁不食肉經には「迦波利婆羅門之子」⁽⁸⁾とし、觀彌勒菩薩上生兜率天經には「彌勒先於波羅捺國劫波利村波婆利大婆羅門家生」⁽⁹⁾とし、Gāṇḍavyūha では彌勒が Sudhana 青年に「私は Dakṣiṇapatha の Mālata 國の Kūṭagrāmaka 村に生れた」⁽¹⁰⁾と言ひ、この傳承を中國では僧肇が受けついで注維摩經に彌勒を「南天竺婆羅門之子」⁽¹¹⁾なりと述べている。この様に、波婆梨と彌勒の消息については雲を掴むが如き狀態であつて、その出生地が北インドであるのか南インドであるのか、兩者の續柄が親子か師弟かもはつきりしない。凡らく Pārāyana にあつた様に波婆梨が北インドより南インドへ移住した人物であつたという物語が混亂の源でないかとも思われるが、これはあくまで推測に過ぎない。それよりも彌勒がバーバリと何んらかの關係があつたことは、Pārāyana を初め龍樹も知るところであり、更にかなり後世の成立とせられる觀彌勒菩薩上生兜率天經にまで受け繼がれていることは、南北兩傳、大小乘兩佛教にと非常に廣い範圍に知られていたことを示すものである。

右のスッタ・ニパータの物語に多少増廣を加えてそのまま取り入れ、更に數種の經典の寓話を合して出來たと考えられるのが賢愚經である。賢愚經はそも／＼譬喩・因縁譚を集めて編集せられたものであるから、賢愚經の中の

物語は、他より素材を集めて、それを巧みに連絡せしめている。その第十二卷には波婆梨品⁽¹²⁾なる一品があるが、その内容を略述すれば次の如くである。

最初は Parayana の物語とそっくり似て居り、バーバリが一バラモンより五百金を乞われたということ、若し施さねば七日にして頭を七つに破るべしくおどされたこと、彌勒をはじめとする十六人の弟子を世尊のところへ遣したということ、世尊がバーバリの名、年が百二十歳で三相を具足していることを言い當てたところ等は全く同じである。唯、彌勒の生い立ちについての説明の部分は明らかに Parayana より後に増補せられた様で、婆羅捺王の輔相が彌勒と名づける男子を生んだ。その子は非常に非凡であるのを聞いた王は、將來その子に自分の王位を奪われるかも知れないと恐れてその子を連れて來る様に命じた。宮内人は王の意向を知り、若しその子に害を加えられる様なことがあつては可愛そうだということで、その子の舅であり、Pataliputra の國師をしていたバーバリのところへやつた。バーバリはその子を愛養し久しからずして諸書に通達したので會を作さんとし、一弟子を波羅捺に遣わす。その弟子は途中、佛徳無量なるを聞いて、佛にまみえんとし、佛のところへ行く途で虎に喰まれて死んでしまつた。そこでバーバリは自から財を集めて大會を設け、バラモン達に布施した。それ以下は Parayana と全く同じである。

更に Parayana の物語が終つて十六人の弟子らは出家し、彌勒を除く十五人は阿羅漢を得た。彌勒らはバーバリの姉の子、寶祈奇を遣わしてバーバリにこの消息を傳えたところ、バーバリは大變喜んで、自らも法を聞き度いと願うが足が弱つている爲、世尊にお越し願ひ度いと乞うた。すると早速佛は眼前に現われ給ひバーバリはその佛法を聞いて阿那含を得たとなつてゐる。この部分も北インドより南インド迄のかなりの距離にあるところを早速、世

尊が眼前に現われ給うたという神話的物語になつてゐることはパーラーヤナより後の添加であることに疑いない。更に物語は續いて、佛の姨母、Maharajapatiの挿話が入る。即ち彼女は自ら織つた金色の衣を佛に奉らんとするが佛は「我の爲のみでは福は弘らない。衆僧に施すべし」といつて受け取らない。そこで衆僧に施そうとしたが誰も受け取らない。遂に彌勒の前に到り、彌勒に奉つた。その後、世尊が波羅捺に化導した時、彌勒は金色の氎衣をつけて威儀すこぶる端正であつて皆、敬いの心を持つたが誰も食を施そうとする者が無い。たま／＼穿珠師が彼を見て敬慕の心を起し、飲食を供養した。時に大長者があつて、娘を嫁がせる爲にこの穿珠師を雇つて珠を穿かせた。その報酬として完成すれば錢十萬を與えたと約束した。しかしその穿珠師は法を聞くことにのみ熱心で長者は何度も人を遣わして督促するが一向に仕事をしない。穿珠師の妻は夫を恨み、少しの勞で十萬錢を得られるというに唯、沙門の話ばかりを聞いていることを責めた。そこで憍陳如は一持戒清淨沙門を請うて供養することの利は十萬錢よりも百車の珍寶よりも多い。舍利弗は一閻浮提中の珍寶より、目犍連は二天下滿中の七寶より、阿那律は滿四天下の寶を得るよりも利の大なることを夫々説いた。阿那律は續いて過去の事を説きそれが終つて世尊は我當來の世を説かんといつて、人民の壽八萬四千歲、身長八丈、人性仁和、十善を修する時、轉輪聖王あり、名を勝伽と曰う。その時にバラモンの家に一男児が生れた。その児を彌勒と曰う。三十二相を具し出家學道して正覺を成じ、衆生の爲に法輪を轉ずる。第一會において九十三億の衆生の類を、第二會にて九十六億、第三會にて九十九億の衆生を度するだろう。この時に彌勒は佛に「我れ彌勒世尊とならん」ことを願つた。佛は彼に對し、彌勒如來の記を授けた。又、その會中にいた阿侍多は佛に「我れ轉輪王とならん」と願つたところ、佛は「汝は但長夜に生死を貪樂し規出せざるや」と訶せられた。

賢愚經の波婆梨品に説かれるところは以上の如くであるが、要するところ、彌勒の生い立ちからバーバリの物語、マハープラジャーパティーの金氎衣の奉施、穿珠師の逸話、彌勒成佛の授記などの説話の集合である。この中、バーバリの話は先に一言したが、次のプラジャーパティーの説話は他に屢々説かれるところで例えば中阿含經四七の瞿曇彌經⁽¹³⁾、佛說分別布施經⁽¹⁴⁾、彌沙塞部和醯五分律二九及び南傳中部經典の *Dakṣiṇā-vibhaṅga s.*⁽¹⁵⁾等に説かれる有名な説話であるが、彌勒には何ら關係がないのである。このゴータミーの話は南北兩傳に傳つてゐるのであるから、かなり古くから言い傳へられていたものに違ひないから、後にこの逸話を彌勒の説話と合體して作り上げたのがこの賢愚經に収められてゐるのである。ところでそのゴータミーと彌勒を合體し、更にこの賢愚經が續いて説いてゐる穿珠師の話が一緒になつて獨立した物語として流布してゐた様である。雜寶藏經の第四に、「大愛道施佛金縷織成衣并穿珠師緣」なるものがそれであつて、話の内容は全く軌を一にするが、賢愚經の方が説明がやや詳細であるところから見ても、既に雜寶藏經に含まれる物語が獨立して成立してゐたものを賢愚經が取り入れたものと見て差し支えなからう。

最後の段は佛が未來の彌勒を豫言し、彌勒に授記を與え、阿侍多の轉輪王たんとする願は訶せられるのであるが、その物語も、この經以外に起源を求められる様であつて同じ様な形は隨處に見付けられる。そのことは項を改めて述べよう。

三、當來佛として説かれる彌勒

彌勒を當來佛として登場せしめる經典で比較的古いものは長阿含經に含まれる轉輪聖王修行經あたりでないか⁽¹⁸⁾

と考える。その理由は後で述べるとして先づその大要を述べよう。

過去世に轉輪王があつた。名を堅固念と言う。王は其の位を太子に譲るに當り、正法を行すべくさとしたが、その太子はそれを守らなかつたが爲に人民は苦厄に陥り、相侵奪して盜賊多く、貧窮饑飢に惱み、人壽も一萬年より五千年、三百年、二百年、百年、十年と減少し、女人は生後僅か五ヶ月で嫁がねばならなくなつた。そこで人は漸く悔恨の心を起し、慈心を懷くようになったので、人壽も十歳より二十、四十、八十、百六十、三百二十、六百四十、二千、五千、一萬、二萬、三萬、四萬、八萬に達し、女人は五百歳で始めて嫁に行くようになった。その時、九種の病のみあつて、一に寒、二に熱、三に飢、四に渴、五に大便、六に小便、七に欲、八に饕餮、九に老の病である。そして大地は平坦で蚊虻等の毒虫なく、瓦石は變じて瑠璃となり、五穀は豊樂である。その時に彌勒如來が世に出現し、梵行清淨にして妙法を説き、弟子は無數千萬も有する。時に懷伽 *Sattva* と名付くる王あつて、七寶具足し、千子を有する。皆勇猛であり、兵仗を用いずして天下は自から治まる。王は大寶幢を建立したが、之を壞して沙門、バラモン、國中の貧者に施し、出家修道した。その物語が終つて佛は比丘らに告げていう。「この様に善行を修し、精勤怠らねば壽命延長、顔色増益、安隱快樂、財寶豐饒、威力具足するのである」と教えてこの經を結んでいる。

以上のようにこの經典は彌勒のことは極く簡單であり、經題にも示す様に、主として轉輪王に關する記述に満されている。しかし乍ら、この經典の説くところの當來人壽八萬歳の思想はやがて當來佛としての彌勒信仰を醸成する大きな足がかりとなつてゐるといつてよい。

そこでこの轉輪聖王修行經の當來人壽八萬歳の説を受け又、賢愚經波婆梨品ともよく似た教説を説くのが中阿含

經に収められる説本經⁽¹⁹⁾と東晉錄に附されていたとする失譯の古來世時經⁽²⁰⁾とである。この兩者は同本異譯であるから説本經によつてその内容を述べると次の通りである。

佛はベナレスの鹿野園にあつた。佛は布施の利益を讃えると阿那律陀も彼が嘗つて一人の辟支佛に一鉢の食を施した爲、無量の福を得たという彼自身の譬喩を説いた。そこで世尊は「阿那律陀が過去の事を説いたから我は未來の事を説こう」といつて、「當來人壽八萬歳の時、閻浮提は大富樂で女人は年五百歳にして嫁に行き、寒熱大小便欲飲食老の外に病なき時、螺 *Saṅkha* と名付くる轉輪王が現われるだろう」と。その時、會中にあつた阿夷哆 *Ajita* が「我は未來久遠人壽八萬歳の時、王となり、七寶成就して千子を有し、大金幢を布施して出家學道せん」と述べたところ、世尊は、阿夷哆に「汝は愚癡人なり、應に一死して再終を求むべし」と訶せられたが、更に次いで世尊は「阿夷哆よ、汝は未來久遠人壽八萬歳の時に王となり號して螺といひ聰明なる智慧をもつて四種の軍を有し天下を整御し、やがて出家學道すべし」と結局、阿夷哆の願を認めて居られる。次に世尊は比丘に、「未來久遠人壽八萬歳の時に佛あり、彌勒如來と名づく」といつて彌勒の徳を語られたところ、衆中より彌勒座より立ち、佛に向つて「我未來久遠の時、佛となり彌勒と號し、大會の比丘無量百千なること今の世尊の如くならん」と未來に彌勒如來となる誓を述べた。時に佛は彌勒を讃歎し「善哉、彌勒よ。汝が發心して大衆を領せんと念う。汝は必らず未來久遠人壽八萬歳の時に佛となり、彌勒如來と名付け、無量百千の比丘あるべし」と未來成佛の記を授けられた。次いで佛は阿難を顧み、「汝、金縷を以つて織られ *Mahāprajāpati Gautamī* より教團に寄進せられた衣を持つて來れ」と命じ、阿難は命に従つてその衣を取り來り佛に奉ると佛はこれを受けて彌勒に告げられた。「汝は如來より此の金縷の衣を受け取り、佛法を衆に施せ」と。そこで彌勒はこの衣を佛より受け取つた。

この説本經の説話を前の賢愚經や轉輪聖王修行經と比較して見た場合、よく似てはいるがその間に多少の相違があり、そのことを吟味することによつて思想の發展、經典相互の關係にも何んらかの手がかりが得られるだろう。

先づ賢愚經と比較して見た場合

- (1) バーバリと彌勒との關係が消えてバーバリの名すら見えない。
- (2) 阿那律陀の語る過去事の内容が異なる。
- (3) 賢愚經では阿夷哆の轉輪王とならんとする願いが判然と佛によつて認められていないが、ここでは一應訶せられはしたが結局は認められた様である。このところは婆沙論⁽²¹⁾にも説かれて居り「契經を分別せんと欲するが爲なり」という契經とは凡らく今のこの説本經等を指すものであろう。そして婆沙論は解説⁽²²⁾を加えて阿氏多は自の利樂のみを求めたから佛より訶せられたのであり、慈氏は他の利樂のみを求めたから讚歎せられたのだとしている。
- (4) 金縷衣の物語で賢愚經は Gautami より直ちに彌勒に贈つたのであるが、ここでは一旦教團へ奉られたものが佛より未來成佛の記を授けて彌勒に手渡されている。この個處も婆沙論に述べるところと一致している。

更に轉輪聖王修行經を加えて考察すると、

- (1) 當來人壽八萬歲（賢愚經は八萬四千歲）の説明はこの轉輪聖王修行經のみが詳しく述べるのであつて他の經典では單に當來人壽八萬歲とのみいつて少しもその説明を加えないということは、既にそのことを説明する迄もなく一般によく知られていたのであつたと理解して差し支えない。賢愚經のみ八萬四千歲とすることは、大乘の彌勒經典が多く八萬四千歲としてゐることから見ても賢愚經が何らかの形において大乘の彌勒經典とかなり接近した位置にあることを示すものである。

(2) 轉輪王の説明については轉輪聖王修行經と説本經とは大体同じであるが彌勒との比重は轉輪聖王修行經では圧倒的に轉輪王が優位であるが、説本經ではほぼ同じ程度か四分六位で彌勒の方にスペースを多く費して説き賢愚經になれば轉輪王は彌勒出現の世を説明する爲にその時の王として出てくるに過ぎない。全く形勢は逆轉するのである。凡らく當來轉輪王の思想が彌勒信仰の伸張に伴い位置を譲つたもので、經典の成立順序もその様になつていない。そのことを裏付ける證固は他にもある。

(3) 當來人壽八萬四千歳の時の人民の病について、轉輪聖王修行經では寒、熱、飢、渴、大使、小便、欲、饕餮、老の九病を數えているが、説本經では寒熱、大小便、欲飲食老として數を示さず（赤沼教授は寒・熱・大小便・欲・飲食・老の七病と數えられる。佛教經典史論二〇八頁）古來世時經は老、大小便、有所思求の三病とし、賢愚經以下、大乘の彌勒經典もすべて三病としているのである。法數等の場合は、後になる程開いて數が増加するのが普通であるが、今の場合は世の中が豊かで平和な苦なき理想の世界を説くのであるから病氣等は少い方がよい。そこで思想が進むにつれてその理想の度も昂上し病の數も減少するのが自然である。このことも先に示した經典成立の順序を裏付けるものである。

(4) 更に考うるに、これら經典をバーバリの説話を含む傳承と含まない方の傳承に大別することが出来る。スッタ・ニパータのパーラーヤナ、賢愚經波婆梨品、智度論、觀彌勒菩薩上生兜率天經等はバーバリの説話を含む傳承であり、轉輪聖王修行經、説本經、古來世時經及び後に觸れる様に彌勒上生經を除いた彌勒の六部經典等はバーバリとの關係を持たない側の傳承であることが知られる。

四、前生話を有する彌勒

現在釋迦佛の本生譚が一時流行した様に、彌勒如來の本生譚も語られていた。しかしその本生譚は一つの形にはまつたものでなかつたらしい。今代表的な二つを例に挙げると次の様である。

竺法護譯の彌勒菩薩所問本願經⁽²³⁾は異譯として大寶積經の第四十二會の彌勒菩薩所問會⁽²⁴⁾なるものがあるが、この經典によれば、彌勒が佛に幾法の行があつて皆諸々の惡道を棄て惡知識に墮ちないのかを問い、佛はこれに答えて一法より十法まであり、この中いづれか一つでも行ずれば皆能くその目的を達することが出来るのであると説かれた。經は後半に入つて趣を異にし阿難が彌勒の辨才具足し、所説の經法が缺減することのないのを讚歎したところが佛はこれに答えて彌勒の前生話によつてその理由を説明した。即ち無數の過去世に炎光佛なる佛があつた。その時、梵志長者の子に賢行と名づくるものあり或日かの佛を見、其の魏々として光色妙好、威神照曜、吉祥の徳を具足するのに感じ、來世には自分もかくあり度いとの願を發し、地に伏していうに、「來世若し我が願の成ずることを得ば、其の證として今佛來つて我が身上を過ぐべし」と。其の時、佛は賢行の念うところを知り、その足を以つて彼の身を踏んだところ、その時に賢行は無生法忍を得た。この賢行が實は彌勒であつたのである。阿難は怪しんで問うた。「彌勒は何が故に直ちに成佛せずして未來久遠の時節を俟つたのであるか。」佛は答えて「四事を以つての故に今直ぐ成佛しないのである。元來彌勒は我に先立つこと四十二劫に發意したのであるが、我は十事を以つて速かに正覺を得たのである」と説かれている。そして最後に彌勒の本願として一切世間の人間が悉く諸垢瑕穢あることなく姪怒癡において大ならず、十善を行じ三毒を滅した時でなければ成佛しないとして經を結んでいる。

以上の様にこの經は明らかに前半と後半とで趣を異にし前半では彌勒は佛の對告衆として登場していながら後半ではその位置が阿難と代わり、彌勒は第三者となつてゐる。そして佛より先立つこと四十二劫の昔に發意し未來に成佛する佛としてその前生話が説かれたのである。この様な彌勒の前生話は Mahāvastu に少し出ているのが最初であらうと干瀉龍祥博士は指適して居られる。

もう一つ彌勒の前生話として興味深いのは一切智光明仙人慈心因縁不食肉經(26)に説かれる兔本生の物語である。その大要は左の通りである。

佛は摩伽提國の寂滅道場にあつた。その時迦波利バラモンに男兒あり、彌勒と名づける。諸梵志が彌勒の威儀光明無量なることを佛に問うた。佛答えていう。「過去無量阿僧祇劫の時、勝花敷と名づくる世界があつた。その世界の佛は彌勒と號する。恒に慈心を以つて一切を教化し、彼の法を聞く者は百億萬劫生死の罪を超越する。時に大バラモンがあつた。名を一切智光明という。佛の慈三昧光大悲海雲經を聞いて佛を難詰しようとしたが屈せしめることが出來ず、逆に佛の弟子となつた。そして『我れこの經を誦する功德を以つて未來過算數劫に必ず成佛して彌勒と號さん』と願ひ、家を捨て深山に入つて修行した。その時、連雨で洪水が止まず七日を經ても食を乞ふことが出來なかつた。時に五百の白兔があり、一兔王、母子の二獸はこれを見て、無上大法をして久住せしめんが爲に我が身をその仙人に供養せんとして薪を集め、火を燃やしてその中に身を投げた。その時、天地大動して彼ら兔は色界に至つた。山樹神は仙人に、『今、兔王母子が供養の爲に火の中へ投身した。已に肉は熟したから之を食すべし』と言つた。實はこの時の白兔王が釋迦で兔の兒が羅睺羅でありこの仙人は彌勒であつた。この仙人は我涅槃後五十六億萬歳の時に穰佉轉輪聖王の治める國土に出現して龍華樹の下で成道し法輪を轉ずるであらう」と豫言せら

れた。

この兔本生は有名な本生譚で Jātaka 三二六 Jātakamāla 六の外、僧伽羅刹所集經⁽²⁷⁾にもあり、又、第三世紀の築造といわれる Amaravati の西北 Nāgārijuna koṇḍa の塔の遺跡からも兔本生の浮彫⁽²⁸⁾が見付けられている。しかし乍らそれらの物語は彌勒とは何んら関係はないのであるが、今の經では既に存在した兔本生の寓話をかりて彌勒の前生譚を作り上げたものである。釋迦佛の前生譚のみならず、更に佛の高弟達の前生話迄も盛んに流行していた時代に、將來の佛たる彌勒の前生話が語られない筈はない。しかしその彌勒の前生話の成立時期は、彌勒が將來佛としての授記思想が確立して以後であることは言うまでもない。又、その最下限年時は彌勒の兜率天信仰の成立以前であつて、これらの前生話には未だ兜率天の思想は現われていない。

五 Brahmayus と Brahmayati を父母とする彌勒

この部類に入るのが、古來より彌勒六部經と言いならわされて來た中の五經典である。

- | | | | |
|-----|-----------|----|--------|
| (1) | 佛說彌勒下生經 | 一卷 | 竺法護譯 |
| (2) | 佛說彌勒來時經 | 一卷 | 失譯附東晉錄 |
| (3) | 彌勒成佛經 | 一卷 | 羅什譯 |
| (4) | 彌勒下生經 | 一卷 | 羅什譯 |
| (5) | 佛說彌勒下生成佛經 | 一卷 | 義淨譯 |

この中(4)は(3)の抄出本である。⁽²⁹⁾(1)は增一阿含經卷第四十四の十不善品の中にあるものと全く同じであるから竺法

護の譯でもないわけである。⁽⁸⁰⁾これら五經典共、説くところは極似しているので一括して大要を紹介しよう。

舍利弗（①のみ阿難）が將來佛たる彌勒の名字、功德神力、國土莊嚴を聴かんことを願うたに對し、佛は「過去七佛のところに於いて佛名を聞き禮拜供養すれば、この因縁を以つて業障を除き、復、彌勒の大慈根本を聞いて清淨心を得る。汝等は一心に合掌して未來の大慈者に歸依するならば我は今、廣く分別して説くであらう」といつてこの經は始まる。さていよいよ經の本論に入り、彌勒國土の莊嚴を述べ、その時の人民の壽命は八萬四千歳にも達する。此の世界には飲食、便利、衰老の三病を除いて全く病氣というものはない。女人は年五百歳で嫁入りする。そこに翅頭末と名付くる大城があり、七寶で莊嚴され、自然に七寶の樓閣を化生して云々と種々の莊嚴を列べた後、その時、轉輪聖王あり、その名を優佉という。七種の兵あつて天下を治め、千子あつて皆勇猛である。又七寶を有して四大寶藏がある。時に城中に大バラモンあり、其の名を修梵摩 *Brahmāyus* といい、その妻を梵摩拔提 *Brahmavati* と名付ける。彼らに一男子が生れた。（増一阿含四四と義淨譯の下生成佛經は彌勒が兜率天より下生したことを説く。）その男の子を彌勒と名付けた。彼は三十二相八十種好を具し其の身は金色であつたという。彌勒はやがて世間を觀するに五欲の爲に衆生が苦しみ、甚だ憐愍すべきであると思ひ、家を厭う様になつた。優佉王は之を憂え、彌勒に種々の財寶を與えて満足せしめんとしたが彼は與えられたものを皆バラモンに施してしまつた。その後、彌勒は諸行無常、是生滅法、生滅々己、寂滅爲樂の偈を悟つて出家學道し、遂に龍華樹の下で成道し、魔の誘惑も退けた。その後、懷佉王をはじめ、大臣、長者等多くの人が弟子となつた。更に彌勒は翅頭末城の龍華樹の下で前後三回の説法をなし、第一會で九十六億人、第二會で九十四億人、第三會で九十二億人の衆生を度すだらう。（失譯の彌勒來時經と義淨譯の下生成佛經はここで終る）その後、彌勒は諸大弟子と共に耆闍崛山に至り、徐

々に狼跡 *Gurupadaka* 山に登つて山を開くと轉輪王の大城の門を開くようであつた。その時、骨ばかりにやせた大迦葉が滅盡定より起ち、釋迦佛の僧伽梨を持つて彌勒に授與して云う。「大師釋迦佛は涅槃に臨んでこの僧伽梨を我に付囑して彌勒に奉れと。」彌勒の弟子は此の時、大迦葉の身體が倭小なるを見て、輕蔑の心を持つたが彌勒は彼が佛の最高の弟子たることを説き、一切大衆悉くが彼に作禮し、迦葉も亦身を虚空に踊らして本處に還り、身より火を出して涅槃に入つた。彌勒は彼の舍利を山頂に収めて塔を建て、惡世に能くその心を修め、大神力あつて高心なきことを讚歎した。彌勒はこの様にして世に住すること五萬億歲である。佛は更に説いて正法が世に住すること六萬歲、像法が世に住すること六萬歲である。汝等は勤めて精進し、清淨心を發し、諸の善業を起すならば世間の燈明たる彌勒佛身を見ることは疑なしと説いてこの經を結んでいる。

そこでこの經の問題點を拾い擧げて見よう。

(1) 彌勒の父母を夫々 *Brahmāyus*, *Brahmavati* とする例は今迄になかつたところであるが、今の五經共にそのようになつてゐる。同じく所謂彌勒六部經と呼ばれ乍らも觀彌勒菩薩上生兜率天經のみは、彌勒の兩親の名を出さない。ここにもこの上生經が他の五部の經典と同類にするわけにはゆかない理由がある。この兩親の名を明らかにし、彌勒を將來佛とし説くものに根本説一切有部毘奈耶藥事と *Divyāvadāna* ⁽³¹⁾ 及び *Visuddhimagga* ⁽³³⁾ がある。

この様に彌勒下生經等に説く彌勒の兩親があちこちの經律論に全く同じ名で出てゐること、それも北傳のみならず南傳に迄知れ亘つてゐることに、この經の持つ影響力の偉大さを知るのである。

(2) 當來轉輪王の説明は、先に紹介した轉輪聖王修行經の説と殆んど一致している。但し轉輪聖王修行經では彌勒と轉輪王との關係は明らかにせられていない。

(3) 彌勒の出家の動機は全く佛傳に説かれるところとよく似ている。凡らく佛傳文學の影響を受けているのであらう。

(4) 増一阿含經に含まれるものと義淨譯の彌勒下生成佛經には彌勒が兜率天より下生して、*Brahmāyus* と *Brahm-avatā* の子になつたように記しているが、「次に説く様に兜率天の信仰は一番最後に現われているから、これらの經典は他の成佛經や來時經よりも新しい要素を含んでいるということが出来る。

(5) 龍華樹の三會の説法は賢愚經にも出ていたがその度者の數が今とは異つてゐる。即ち、賢愚經では初會より九十三億、九十六億、九十九億と後になる程、三億人づつ度者の數が増加していつたが、今の場合は、九十六億、九十四億、九十二億と二億人づつ減少していくのである。

(6) この經の最初に説かれていた過去七佛に禮拜供養せよと説かれていたことは、佛像彫刻となつて現存している。即ち *Mathura* 博物館所藏の *I. 7. Lakṣṇa* ⁽⁸⁷⁾ 博物館所藏の *B. 182, B. 208.* ⁽⁸⁸⁾ の浮彫々刻は八佛並坐の形で描かれてゐるがその八佛とは過去六佛と現在釋迦佛と未來彌勒佛である。今の彌勒下生經に彌勒は勿論、過去佛を禮拜せよと特に經の劈頭に説くことと、この彫刻を刻らしめた信仰とは同じ基盤の上に立つてゐる様に考えられる。これと關連して龍華樹を手にした彌勒像⁽⁸⁷⁾が、屢々西北インド地方から發見されている。かかる佛像も多分、龍華樹下で成道し三會の説法をなしたと説く今の彌勒經典の説によるものに相違ない。

六、彌勒と阿逸多との混同

彌勒 *Maitreya* と阿逸多 *Ajita* を同一人物と見る傳承が一部にある。それは從來考察して來たように、彌勒は殆

んど阿逸多と共に説かれ彌勒が未來の佛であるに對して阿逸多は未來の轉輪聖王として説かれてきたものが、何時の頃からか兩者が混亂して一部に誤り傳えられたのであらう。

その最も古いと思われるのはマハーヴストゥに、

「我れの後、*Ajita* 菩薩が世の中の佛となるだらう。彼の名の *Ajita* は個人の名であり、*Maitreya* は *Bandhumā* 王國における種姓の名である。⁽³⁸⁾」

と解釋せられてゐる。*Mahāvastu* は説出世部の書であると言うから説出世部では、このような理解をしていたのであらう。しかし他の部派で、彌勒と阿逸多とを混同している例は私の知るところではないが、その様な理解は大乗佛教で多く見られる。例えば無量壽經の下卷に彌勒が登場して來るが、梵本では *Ajita* 藏本でも *mi pham pa* (阿逸多) である。漢字譯を調べると漢譯、吳譯は阿逸菩薩と譯して居り唐譯が時々阿逸多と譯す外はすべて彌勒と譯してゐる。又、法華經では梵本から混同して居り、經典の編者がいう時には *Maitreya* 佛が呼ぶ時には *Ajita* という慣例になつてゐる。即ち「佛は彌勒に告げて曰く。阿逸多よ。」の如くである。⁽³⁸⁾ 妙法華はこの箇所でも彌勒と譯してゐるのである。その妙法華を譯した羅什の弟子の僧肇は注維摩經において、

彌勒菩薩 什曰姓也、阿逸多字也⁽⁴⁰⁾

と記してゐる様に同一人物として理解してゐるのである。この様に中國は勿論混同してしまつてゐるが *Mahāvastu* や *Saddharma-puṇḍarīka* にも *Maitreya* と *Ajita* を同一人物視するところを見れば早くから梵文學圈においても一部でその様な傳承があつたことを知り得る。更に五・ラモート教授の指適によれば、その成立年代は定かではないが、*Anāgatavaṃsa* に「ゴータマ佛陀に至るまでの二十七佛を擧げ、*Sumitta*, *Metteyya*, *Muhutta* の三佛の下

Metteyya の前生について述ぶ、この Metteyya は Ajātasattu の息子 Ajita 王子であつたと述べてゐる。これら傳承の下に成立したのが觀彌勒菩薩上生兜率天經である。この經は兜率往生を説き後世の彌勒信仰に大きな役割を果した經典であるから例の様にその大要を次に述べる。

佛が舍衛國、耆闍崛山にあつた時、その會中に彌勒と名づくる菩薩があつた。その時、優波離は佛に問うて曰く、『世尊は昔、毘尼や經藏の中で阿逸多が次に佛となるべし』と説かれたが、この阿逸多は凡夫身を具して、未だ諸漏を斷ぜず。此の人命終して當に何處に生ずべきや。其の人今は出家なりと雖も、禪定を修せず、煩惱を斷ぜず。』佛はこれに答えて、『此の衆において彌勒菩薩に阿耨多羅三藐三菩提の記を説く。この人は今より十二年の後に命終して必ず兜率陀天上に往生することが出来る』と。そして兜率天の莊嚴を説いて正觀を勧め邪觀を諷めている。次いで優波離が「彌勒は何時此の土を没して彼の天に生ずべきか」と問うたのに對し佛は「彌勒は先に波羅捺國劫波利村の波婆利大婆羅門の家に生れた。後十二年二月十五日に滅定に入り、彼の天に上り、彼の宮殿七寶の師子座に化生し、身長十六由旬、三十二相八十種好を具足する。彌勒は頭に天冠を戴き眉間に白毫の相光がある。晝夜六時に説法して諸天子を度すること五十六億萬歳にして閻浮提に下生する。是れ彌勒下生經に説くが如くである。佛滅度の後は、精勤功德を修し、衆三昧を行じ、經典を讀誦し、常に佛を念じ、彌勒の名を稱せば一念の頃にして八齋戒を受け、命終の後、即ち兜率天に往生することは疑ない。又、人若し彌勒の名を聞き、歡喜して恭敬禮拜すればこの人命終の後、此の天に往生することが出来る。但、彌勒の名を聞くのみでも闇黑處、邊地、邪見、諸惡律儀に墮することはない。或は又、若し一念の頃にも彌勒の名を稱せば千二百劫生死の罪を除き、但、彌勒の名を聞き合掌恭敬すれば五十劫生死の罪を除き、設い天に生じなくとも未來世中に龍華樹下にて彌勒に值遇す

ることが出来る。」と説かれるのである。

右の要旨によつて次のことを指適し得る。

(1) 經題の示す如く、彌勒が十二年後に兜率天へ生じ五十六億萬年後に再び閻浮提に下生するといふのであるが、この世の衆生も、彌勒の名を聞き、又稱えることによつて彌勒の兜率天へ上生することが出来るとする兜率上生の思想は未だ嘗つて見なかつたことである。

(2) 兜率上生の爲には聞名、稱名等の行が必要とされるが、これは觀無量壽經に説かれる稱名往生の思想と軌を一にするものである。稱名思想の形成については、先に「印度學佛教學研究」通卷第21號⁽⁴⁵⁾に發表した如く、稱名の原語は梵文佛典には見當らないところよりして、又、羅什の翻譯したものに稱名の語が頻繁に出ていること等から、稱名思想の成立地を梵文學圈の外、羅什の行動範圍と推定したように、この經典もかかる稱名思想の盛んであつた背景の下に成立したものと考えられる。經の中に「如彌勒下生經說」ということは彌勒下生經より後の成立なることを示し、又、經題に觀の字を冠する一群の觀經であるところより尚更、その感を深くする。

(3) その様に後代の經典であり乍ら、彌勒思想の初期の頃に説かれていた彌勒と波婆利との關係が再びこの經典に語られていることは、一見非常に奇異を感じる。しかし羅什の譯した智度論にも波婆利を彌勒と關係付けている點に注意しなければならない。即ち先にも述べた如く、羅什と稱名が深い關係にあると同様に稱名と今の經とは密接な關係にある。又、智度論は龍樹の作というが羅什の意見が相當に含まれているのであるから、稱名を介して羅什譯の智度論とこの觀彌勒上生經が同じ様なことを説いても別に不思議はないわけである。換言すれば羅什の佛教的教養を育てたところは稱名思想の盛んなところと見られるが、その地盤には彌勒と波婆梨を關係付ける説話―例え

ば賢愚經のようなもの——が知られていたということである。

(4) 彌勒の兜率天に往生する信仰は、經典には割合に見當らないが次に示す生經の中の佛説五百幼童經は明らかにこの信仰を説いている。

五百人の幼童が仲良く遊んでいたところ、突然大雨に見舞われ彼らは悉く溺死した。衆人之を見て歎惜せざるなく、父母は声をあげて大哭した。しかし彼らは兜率天に生じ彌勒佛にまみえ、法を聞いて、父母に「愁憂する勿れ、菩薩心を發せば長久を得る」と説いた。父母達はこれを聞いて皆道意を發した。

この生經は竺法護の譯とせられるが、同じ法護譯の正法華經に

臨終壽時、面見千佛、遊在吉安、不墮惡趣、壽終之後生兜率天、適生天上、八萬四千諸王女衆、往諸其所、鼓諸伎樂、而歌頌德。

と兜率往生を説いていることにも注目したい。

七、彌勒思想成立の年代學的考察

松本博士の「彌勒淨土論」⁽⁴⁵⁾には將來佛としての彌勒信仰は大乗教徒によつて創說せられたもので、その年代は佛滅三百年以後から約五百年の間に出來たものと結論され、その理由としては、法顯傳、西域記 Mahāvamsa 等の史書を驅使して導き出されたのである。そこで私はそれらの史書についてはごく必要のもののに止め、違った方向よりこの成立問題に検討を加えたいと思う。

西紀三九九年、長安を發つてインド南海の旅行に出發した法顯は、北天竺に入らんとするところで次の見聞をし

たことを報告している。即ち法顯傳陀歷國の條に⁽⁴³⁾

雪山を超え將に北天竺に入らんとする所、一小國あり。陀歷という。其の國には昔、羅漢あり、神足力を以つて一巧近を將い、兜率天に上り、彌勒菩薩の長短色貌を觀、還り下つて木を刻み像を作る。長さ八丈、足趺八尺齋日には常に光明あり。諸國の王、競つて供養を興す。古老相傳う。彌勒の像を立ててより後、天竺の沙門あり、經律を賣して此の河を過ぐる者あり。像の立たるは、佛泥洹の後三百許年に在り、計るに周氏平王の時に於てせり。茲に由つて言へば大教の宣流は此の像より始まれり。夫の彌勒大士が軌を釋迦に繼ぐに非らざるよりは、孰か能く三寶をして宣通し、邊人をして法を知らしめんや。固に知る冥運の開くことは本と人事に非ず」と。

ここに傳えるところによれば、法顯は實際に陀歷 Dael 國にて彌勒の像を見たのである。そして古老の言によれば佛涅槃後三百年の頃に建立せられ、それ以後、佛教が宣流するようになったという。若しその言が事實を傳えるものとすれば、マウルヤ王朝の末期からシュンガ王朝の初期の頃に相當するであろう。この頃に陀歷へ佛教が傳つたということは、アシヨカ王の傳道師派遣や、プシャミトラ王の破佛によつて、都市より陀歷の如き邊境の地に佛教が流入したことは十分に考えられることであるが、その頃に彌勒像が作られていたとは考えられない。従つて法顯が彌勒像を見たことは事實と認められるが、古老の言は信賴し難い。

又、セイロン島における記事には⁽⁴⁴⁾

天竺の道人の高座上に於いて經を誦するを聞くに云わく。佛の鉢は本と毘舍離に在りしも、今は捷陀衛に在り。若干百年を竟れば當に復た西月氏國に至るべし。若干百年にして當に于闐國に至るべし。住すること若干百年にして當に屈茨國に至るべし。若干百年にして當に復た師子國に至るべし。若干百年にして當に復た漢地に來到すべ

し。若干百年にして當に中天竺に還り已つて當に兜率天上に上るべし。……彌勒將に成道せんとする時に至りて鉢は還た分たれて四となる。……佛法滅して後は人壽轉々短かく乃し五歳に至る。……我れ今共に諸善を行じ慈悲の心を起して信義を修行せん。……展轉して壽倍し乃し八萬歳に至る。彌勒出世して初めて法輪を轉ずるの時、先づ釋迦遺法中の弟子なる出家の人、及び三歸・五戒・八齋法を受けて三寶を供養せし者を度し、第二、第三次に有縁の者を度すなりと。

と聞いたところを記しているが、人壽八萬歳の説は轉輪聖王修行經と同じであり、且つその上に兜率天の思想が入っている。セイロン島に彌勒の信仰があつたことは、マハーバンサの Dhātusena (A. D. 463~479 在位) の條にも見られるから、とにかく法顯の渡印した西紀四百年代の初頭頃には既に西北インドから南はセイロンに迄、彌勒信仰が行われていたことは事實と見てよい。とにかく歴史書では彌勒に關する限り法顯の時代よりさか上ることはできない。

そこで次に佛像彫刻の面より彌勒信仰の成立年代の推定を試みよう。インド及びその周邊より彌勒像の發見された例は多いが、その中でも最も古いとせられるものは A. D. 130~150 年頃の制作と推定せられるマツラー出土の彌勒像である。⁽⁴⁹⁾ その像は高さ 61 cm の立像で頭部は螺髪で如來形であるが、瓔珞や天衣をそなえた菩薩の形式であると言われる。この如來、菩薩の混合形式から上野照夫氏は、彌勒が當來佛としての宗教的特性からであろうとされているが、これを以つて當來佛としての彌勒の信仰が確立していたことも出来るであろう。この像のみならず、一般に彌勒像はガンダーラ、マトウラー共にクシャーナ時代の初期より現われて居り（多くは水瓶を持つ）先に一寸觸れた八體並坐の像はグプタ時代のアジャーンタの壁畫にもあり、又、パフラバ時代には東インドに

蓮華を持つたり寶冠に塔を頂いたものが多いと言われる様に彌勒の造像は、廣く又、長く續けられた模様である。以上、彌勒像の制作年代より、當來佛としての彌勒信仰はクシャーナ時代の初期には確立していたと見たが更に、中國における彌勒信仰の流傳より考察を進めたい。

中國で彌勒の兜率願生者として有名なのは釋道安 (A. D. 314~385) であり、又、彼が彌勒信仰者として知られている一番古い人でないかと思う。慧皎の高僧傳五には

符堅遣使送外國金箔倚像高七尺。又金坐像・結珠彌勒像・金縷續像・織成像各一張。每講會法聚一軀羅列尊像。⁽⁵⁰⁾

といい、又

安每與弟子法遇等、於彌勒前立誓願生兜率⁽⁵¹⁾

と傳えることは、道安が彌勒信仰者であり且つ兜率往生の思想が既に入つていたことを示している。從來、考察して來た様に、彌勒信仰の中でも兜率往生を含む思想は一番成立が遅いのである。その信仰を説く代表的な經典は觀彌勒菩薩上生兜率天經であるが、この經典は沮渠京聲 (……) の譯とせられるから、道安の時代には未だ知られていなかった筈である。にも拘らず何時頃から兜率往生の思想が中國に知られる様になつたのであるかが次に問題となる。先に、無量壽經の諸本對照により、吳・漢兩譯は彌勒或は慈氏の名を出していないことを知つたから、その時代は彌勒という名も知つていなかったのであらう。そうすると吳・漢と道安の間ということになるが私は竺法護 (233~308) が彌勒信仰の紹介者でないかと推定する。竺法護には、彌勒菩薩所問本願經の翻譯があり、又、出三藏記集⁽⁵²⁾には彌勒成佛經を譯したことを傳えている。その他、兜率往生を説く生經の翻譯もあり、先に示した様

に正法華經にも一部に兜率往生を説いていること等がその理由である。若しこの推論が許されるとするならば、彌勒信仰の中で最も後に加わつた兜率往生の思想の成立の最下年限は竺法護の來支した二六五年頃となり、それ以前に兜率往生の信仰が成立していたことが確實となる。又、當來佛としての彌勒の信仰は更に古いから、マツラー出土の最古の彌勒像の制作年時たる一三〇〜一五〇年頃、即ちカニシカ王の時代を最下年限とすることが出来る。そのことはカニシカ王の保護の下に編纂されたと傳える婆沙論に説本經が引用せられていたことによつても確證され得る。それを何年逆上り得るかは目下のところ推測の域を脱しない。

八、結　　び

以上、彌勒に關する思想を一通り調査したのであるが、これですべてではない。この外にも例えば、彌勒菩薩所問經、稻苧經、慈氏菩薩誓願陀羅尼經といった經典があるが、彌勒思想の展開にはあまり影響もなく重要でないと思つたので省略した。とにかく一バラモンの弟子であり、後に佛弟子となつた彌勒が最初であり、當來の世に理想の國土を治めるであらう轉輪王の思想に刺戟せられて、その世に法王として出現するであらう彌勒の信仰が確立した。その後、佛の本生譚が盛んになると共に彌勒佛の本生譚も一部で語られ、西方彌陀淨土の信仰の影響を受けて彌勒の現在の居所たる兜率天への往生思想が萌生えるに至つた。色々問題はあるだろうが一應この様に考えたのである。勿論、授記思想、過去佛、各種淨土往生思想との關係も更に追究しなければならないと思うが、今は彌勒思想展開の基礎作業として、佛典を整理し、その結果を組織付けようと試みたのである。彌勒關係佛典の内容を整理したところを表にして見たので参考までにその表を付け加えて終とする。

彌勒關係佛典內容比較表

	佛典名	事	項
Parāyana	○	Bāvari と關 係 付 ける	
智 度 論	○	Gotami の金縷衣の寓話	
轉輪聖王修行經		穿 珠 師 の 寓 話	
說本經・古來世時經		彌勒出世は當來人壽八萬歲	
婆 沙 論		〃 當來人壽八萬四千歲	
賢 愚 經	○	〃 佛滅後五十六億萬年	
增 一 阿 含 經 20		勝伽轉輪王出現の豫言	
同 經 41		Ajita 轉 輪 王 を 願 う	
同 經 43		彌 勒 佛 出 現 の 豫 言	
同 經 44 (彌勒下生經)		彌 勒 成 佛 の 記 を 受 く	
彌勒大成佛經		三 會 の 説 法	
彌勒下生經(抄本)		彌 勒 骨 身 の 迦 葉 と 會 見 す	
彌勒來時經		彌 勒 佛 の 前 生 話	
彌勒下生成佛經		兜 率 思 想	
根本說一切有部毘奈耶藥事		修 梵 摩 と 梵 摩 拔 提	
Dīvyaḍāna		彌 勒 と 阿 逸 多 と の 混 同	
彌勒菩薩所問本願經			
Mahāvastu			
觀彌勒菩薩上生兜率天經	○		
一切智光明仙人慈心因緣不食肉經			
正 法 華 經			
生 經			
Visuddhimagga			
Mahāvaiṣa			
Anāgatavaiṣa			

註

- (1) 中村元博士「比較思想論」一七八頁以下參照 C.W. Morris; *The Open Self*, 1948.
- (2) 中村博士前掲書 三二七頁 L. Mumford; *The Conduct of Life*, 1951.
- (3) J. Filiozat; *Maitreya l'Invaincu*, JA, 1950, p. 145-149.
J. Przyluski; *La croyance an Messie dans l'Inde et dans l'Iran*, RHR, t. c, 1929, p. 1-12.
S. Lèvi; *Maitreya le Consolateur*, p. 360
M. Abegg; *Der Messiasglaube in Indien und Iran*, Berlin, 1928.
E. Lamotte; *Histoire du Bouddhisme Indien*, Louvain, 1958, pp. 784-785.
- (4) 赤沼智善教授「佛教經典史論」一七一頁
- (5) D. Andersen and H. Smith, *Sutta-nipāta*, 1948, pp. 190-197.
南傳藏 二四、三七〇—三八六
- (6) 智度論二九、大正二五、二七三 a
この外に智度論四、大正二五、九二 a にも三相のことが出てゐる
- (7) 賢愚經一二、大正四、四三三 c
- (8) 一切智光明仙人慈心因緣不食肉經 大正三、四五七 c
- (9) 觀彌勒菩薩上生兜率天經 大正一四、四一九 c
- (10) *Gaṇḍavyūha*, p. 527
六十華嚴六〇 大正九、七八二 c
- (11) 注維摩經一 大正三八、三三一 b
- (12) 賢愚經一二、大正四、四三二 b—四三四 c
- (13) 中阿含經四七 心品 大正一、七二一 c—七二三 a
- (14) 佛說分別布施經 大正一、九〇三 b—c
- (15) 彌沙塞部和醯五分律二九 大正二二、一八五 b—
- (16) M. N. III. 142. *Dakṣiṇā-vibhāṅga s.* pp. 253—257

- (17) 雜寶藏經四、大正四、四七〇a—四七一a
- (18) 長阿含經六、轉輪聖王修行經 大正一、四一c—四二a
同類の經典として外に
- 中阿含經七〇 轉輪王經 大正一、五二〇b—五二五a
D. N. III. 26. Cakkavatti-Sihanada s. pp. 58—79.
- (19) 中阿含經一三、說本經 大正一、五〇八c—五一c
- (20) 佛說古來世時經 大正一、八二九b—八三一a
尙 Thera G. 910—919 偏註にもあり
- (21) 阿毘達磨大毘婆沙論一七八 大正二七、八九三c—八九四b
- (22) 何故世尊詞ニ阿氏多而讚慈氏。答阿氏多慈獨於下有起意樂一起勝解一起欣喜一起希望一起尋求上故佛訶之。慈氏菩薩不於有起意樂乃至尋求。然於三利樂三諸有情事一起意樂乃至尋求一故佛讚之。復次阿氏多求三世間輪王位一故佛訶之。慈氏求三出世法輪王位一故佛讚之。如是求三流轉王位一求三還滅王位一說亦爾。復次阿氏多求三自利樂一故佛訶之。慈氏求三利樂他二故佛讚之。
- (23) 彌勒菩薩所問本願經 大正一二、一八六c—一八九b
- (24) 大寶積經一一一 彌勒菩薩所問會 第四十二、大正一一、六二八a—六三一c
- (25) 干渴龍祥博士「本生經類の思想史的研究」九七—九八頁
- (26) 一切智光明仙人慈心因緣不食肉經 大正三、四五七c—四五九a
- (27) 僧伽羅刹所集經上 大正四、一二〇c—
- (28) 干渴龍祥博士著「ジャータカ概観」一二九頁に兎本生を描いた浮彫の斷片の寫眞がある。
- (29) 松本文三郎博士「彌勒淨土論」二六—二九頁
- (30) 松本博士前掲書 二三—二四頁
- (31) 根本說一切有部毘奈耶藥事六 大正二四、二四c—二五a
佛言、於未來世人壽八萬歲時、有轉輪王名曰餉佉……時王有婆羅門名曰善淨。是王大臣善淨有妻名曰淨妙常以慈心遍覆一

切後時誕子號爲慈氏。……爾時彌勒佛八萬俱胝苾芻前後圍繞詣尊足山向迦攝波苾芻骨鎖留身之所。指山門開。于時彌勒世尊。以其右手。擎取迦攝全身骨鎖。置左掌中。爲諸聲聞廣說妙法。

(32) Cowell and Neil; *Divyāvadana*, III, pp. 60—62.

(33) Warren; *Visuddhimagga*, p. 367. 南傳藏 六三、四二五

(34) 山本智教教授著「マトウラの古美術」八一頁

(35) 山本教授前提書 八一頁

(36) 山本教授前提書 四三頁

(37) 逸見梅榮氏著「印度に於ける禮拜像の形式研究」二七四頁

『E. Lamotte 前掲書

(38) Mahāvastu I p. 51 又同△Ⅲ p. 246 ところが説かれてゐる。

(39) H. Kern and B. Nanjo, *Saddharma-puṇḍarīka sūtra*, p. 308. *atha khalu bhagavān maitreyaṁ bodhisattvaṁ mahāsattvaṁ āmantrayate sma/sādhu sādhuvajita/*

(40) 注維摩經一、大正三八、三三一b

(41) 『E. Lamotte. 前掲書 p. 783

(42) 觀彌勒菩薩上生兜率天經 大正一四、四一八

(43) 拙稿「稱名思想の形成」(印度學佛教學研究通卷第21號、三八—四九)

(44) 生經四、佛說五百幼童經 大正三、九五a—b

(45) 松本文三郎博士 前掲書 一六一頁

(46) 高僧法顯傳 陀歷の條

(47) 同 右 師子國の條

(48) Mahāvamsa 第三十八章 Dhātusena 王の條には

「王が花崗石を以て佛像を造り之を莊嚴し、又菩提樹の南方に彌勒菩薩の像を造り、之を莊嚴して殿堂に安置した」と傳う。又、第三十二章には *Dutthagamani* 王 (B. C. 104~80) の臨終の情景を述べて「王二日上座 *Abhaya* に問う

ていう。『天界の中孰れが最も樂しきか』と。上座之に答えて『先聖傳えて言う。兜率天は是れ快樂無比の天界なりと、兜率國土には慈悲の彌薩彌勒と號するものあり。佛の來るを待つ』と。王此の語を聞き眠るが如くに逝けり』という。しかし乍らこの記事は、松本博士も指適せられる如く、後人が王の死を美化せんが爲の修飾であろうと考えられるから、これを以つて當時、既にセイロン島に彌勒信仰が存在したとすることは出来ない。

(49) 上野照夫氏「彌勒像の圖像學的考察」塚本博士頌壽記念佛教史學論集 一〇一頁

(50) 慧皎、高僧傳五、道安の條、大正五〇、三五二b

(51) 同 右 大正五〇、三五三b

(52) 出三藏記集二、大正五五、八a 歷代三寶紀一一、大正四九、九六b